九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学の進める教育改革で求められること

日野, 伸一
九州大学大学院工学研究院

https://doi.org/10.15017/1650891

出版情報：基幹教育紀要. 2, pp.7-8, 2016-03-30. 九州大学基幹教育院
バージョン：
権利関係：

九州大学の進める教育改革で求められること

日野　伸一

大学院工学研究院, 〒819-0395 福岡市西区元岡 744

Requirement for educational innovation in Kyushu University

Shinichi HINO

Faculty of Engineering, 744, Motooka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

*E-mail: hino@doc.kyushu-u.ac.jp

今や、わが国の大学教育を取り巻く改革の嵐、真っ只中である。九州大学においても、第３期中期目標・中期計画期間に向けたアクションプラン 2015 の中で、教育に関して「グローバル人材の育成」として、数々の主要な施策、具体的な取組みが示されている。たとえば、新学部設置と国際コースの拡充(30 年度)、四学期制の導入(29 年度)、改正 GPA 制度の本格実施(28 年度)、学士課程における入試形態の多様化(30 年度)など、具体的なロードマップとして明記されている。これらの背景には、社会構造の変化があげられる。今や、世界的にヒト・モノ・カネと情報のグローバル化が急速的に進んでいる。同時に、わが国をはじめ、先進諸国での少子高齢化や産業構造、就業構造の転換など、大きな社会構造の変化の中で対応できるグローバル人材の育成強化が喫緊の課題とされている。そのため、大学などの高等教育に関わる仕組みや構造の変革が社会的に求められているのである。

さて、平成 26 年度からスタートした基幹教育は、「学び方、考え方を学ぶ」姿勢の涵養こそが学問追求の基本であるとの観点に立ち、生涯に亘り、自ら主体的に学びのできるアクティブ・ラーナーを育成することをミッションとして掲げている。決して座学中心の知識詰込み型の教育ではなく、文理融合クラスによる課題協学科目や基幹教育セミナーなど、学生が授業に主体的に、あるいは協働して参加するユニークな授業形態を取っており、まさにアクティブ・ラーナ―育成の要として大いに教育効果が期待される。言うまでもなく、九州大学の基幹教育は全学出動態勢で担当することを基本としているが、中でも基幹教育を実施するためのカリキュラムやシラバス作成、授業担当の調整など、マネジメントの責任は基幹教育院に所属する教員各位に委ねられており、日頃のご尽力に敬意を表する次第である。今後、平成 30 年度からの設置が予定されている新学部の専任教員として参画される教員もいらっしゃるであろうが、基幹教育の重要な責務を兼務しての過重の負担増とならぬよう、組織全体として留意する必要があろう。

前述した新学部構想もほぼ内容が固まってきたところである。新学部は、九州大学の国際性の原則を基本理念とし、既存学部のような専門領域による縦割り型ではなく、専門領域を超えた横断型

Bulletin of KIKAN Education, Vol. 2, 2016
© 2016 Faculty of Arts and Science, Kyushu University

の Problem-Based Learning(課題追求の学問)を基としたグローバル教育を前面に立てたリベラルアーツ系の学部である。まさに、グローバル化した社会において求められる、コミュニケーション能力とデザイン能力をもって、自ら課題を発見し、解決に向けて主体的に取組むことのできる人材を育成することをめざしている。

一方で、理工農系、医歯薬系、法経系などの既存学部は体系化された専門分野に軸足をおく、新学部とは対極的な専門積上げ型の教育体系となっている。筆者の所属する工学部を例に、今後のグローバル化社会で求められる教育のあり方について具体的な私見を述べることにする。

産業、経済、社会構造が大きく変革し、グローバル化するとともに、地球規模での環境変化が進む現代社会においては、カバーすべき専門知識・技能も複雑化、多様化している。しかし、大学の卒業所要単位数は 4 年生課程で 124 単位以上と定められ、ひと昔前に比べ低減されている。また、一方で、専攻教育課程においては、高い専門知識の修得だけでなく、広い学際的な教養が必要とされている。同時に、社会から大学卒業生に求められる素養として、プレゼンテーション力やディベート力、そして俯瞰的な視野でものごとを捉え、企画し実行しうるデザイン能力が求められている。T 型あるいはπ型と称される教育がますます重要視されている。このような状況の下では、もはや学士課程において専門教育を完結することは困難であると考える。したがって、九州大学工学系のように、大学院修士課程に 70%以上の卒業生が進学するような大学においては、修士課程を含めた 6 年一貫を基本として教育カリキュラムを体系的に構築するべきであると考える。すなわち、学士課程においては、基幹教育を通じてのアクティブ・ラーナーとしての素養および教養教育と専門教育の基礎を重視し、学士課程の高年次から大学院修士課程において、高度な専門教育を展開していくようなカリキュラム構成を再構築することが必要であると考える。

また、基幹教育カリキュラムで実施あるいは計画されている、学部 2 年次以降での高年次基幹教育や大学院での大学院基幹教育もきわめて重要である。さらには現在、大学院リーディングプログラムで取り入れられている学際的かつ PBL 教育などを活用して、高度な専門知識と人間力を兼ね備えた人材育成を図り、社会の要請に応えることが重要であると考える。

以上のように、今まさにさまざまな大学教育についての変革が求められている中で、大学が社会の付託に応えていくためには、教育現場で実践する我々、教員個々の意識改革がまずは必要であると考える。